



津波直後の魚町海岸(3月11日午後4時ごろ)

伝承

気仙沼市の新聞社「三陸新報社」から、『巨震激流』という写真集が刊行されています。迫りくる津波を捉えた多くの写真、瓦礫、救出活動、避難所の様子など、それらは恐ろしく辛い記憶ですが、同時に、後世に残すべき多くの知恵や、未曾有の災害を乗り越えて行く人々の心意気の詰まった未来への教科書でもありました。



例えばこの写真↑、よく見るとお皿にラップをかけて使用しています。こんなところから、「食器を洗う水が不足していた」「ラップを使えば水が節約できる」「非常持ち出し袋にラップを入れておくとよいのでは」などの情報を読み取ることができます。

未来への提言

震災翌日から発行された「三陸新報津波特別号」や「その時記者は……」という連載記事も収録



記憶 後世へ

すべて奪った引き波

中島 武彦

東日本大震災の証言

「高き住居は児孫の和楽」

＝高台にある家は子孫に幸福と繁栄をもたらす、と刻まれた石碑は、岩手県重茂半島・姉吉地区の林の中にある。昭和8年の大津波のあとに建てられたもので、碑文は「想へ惨禍の大津浪、此処より下に家を建てるな」と続く。代々、海草や貝を育てて生計をたててきた漁村の人々が、大津波のあと、この石碑よりも高台に集落を再建、今回の津波では39mの高さまで水がせり上がったが、姉吉地区は難を逃れることができた。



しかし、同じ岩手県でも、昭和大津波の碑を越えて津波が押し寄せた地域もあったし、姉吉でも家族を迎えに行った人が車ごと流されて犠牲になっている。言い伝えや先人の知恵があっても悲劇を防ぎきれなかった、今回の津波の規模の大きさを改めて思う。

←宮古市姉吉地区の津波教訓碑

過去からの警告

we support!

RQ
市民災害
救援センター

「東北に黒糖を送ろう! 大作戦しんぶん」改め
復興支援『すけやきた』しんぶん

立秋
朔日
東北はもうすぐの冬配

RQ 登米の取りくみ「聞き書き」

RQ 登米では、白露号でご紹介したとおり、被災した方のライフストーリーを記録する活動をしています。付箋にキーワードを書き出し、時系列に並べ、細かな情報を補いながら書き起こしていきます。今こそ未来のために、記憶を引き継ぐ時なのです。(聞き取りボランティア募集中!)



告知

あの「フェイト新聞」も本になりました!
気仙沼小学校 避難所でしか読めなかった伝説の新聞が! あのとき子供もがんばった、という記録です



ボランティア支援基金はじまりました [東部地区] ラ・ティータ西表 宇南風見 大原港ターミナル(竹富町観光協会、八重山観光フェリー) 大富売店 [西部地区] ゆりみな(上原港ターミナル) スーパー川満 西部歯科診療所 santa nu neene カフェなかゆくい ダイビングチームうなりざき 民宿ハイン館 民宿あけほの館 民宿母家 マリンロッチャアトク 西表島エコツーリズム協会 紅露工房 イルンティ フタテムラ 星砂スーパー 金城旅館

関係作戦に引き続き募金箱を設置していただきありがとうございます!